



一死刑論

一禾花煤助法之說

一養精神一說二

明六雜誌

第四十一號



頃日吾儕盍簪シ或ハ事理ヲ論シ或ハ  
異聞ヲ談シ一ハ以テ學業ヲ研磨シ一  
ハ以テ精神ヲ爽快ニス其談論筆記ス  
ル所積テ冊ヲ成スニ及ヒ之ヲ鏤行シ  
以テ同好ノ士ニ頒ツ瑣々タル小冊ヲ  
リト雖<sub>凡</sub>邦人ノ爲ニ智識ヲ開クノ一  
助ト爲ヲハ幸甚

明治甲戌二月

明六同社識

明六社雜誌第四十一號明治八年八月刊行

○死刑論

津田眞道

刑ニ死刑アルハ猶罪犯審問ノ法ニ拷問アルガ如キ歟拷問ノ其法ヲ失シタルハ余業已ニ屢之ヲ論セリ今請フ死刑ノ刑ニ非ル所以ヲ説明セシ

夫レ刑ハ人ノ罪惡ヲ懲ス所以ナリ懲ルトハ何ソソ曰ク犯人惡事ノ罪業タル罪業ノ畏ルベキヲ知リテ之ニ懲リ之ヲ悔ヒ善道ニ復歸スルナリ刑法ノ目的宜シク此ノ如クナルベシ然而シテ死刑ハ苟モ之ヲ施行スレバ則人命ヲ絶ツ豈之ヲ懲悔ノ法トスベケンヤ縱令其人懲悔スル所アルモ其人已ニ死シテ其心魂其體ニ在ラズ之ヲ奈何ソソ善道ニ歸シ善行ヲ人間ニ脩ムルニ由アラシヤ故ニ曰ク死刑ハ刑ニ非ズト立法ト云ヒ司法ト云フ吾人ノ之ヲ立テ之ヲ司ル所ナリ吾人元來人ヲ活スノ力徳ナクシテ擅ニ人ヲ殺スノ法ヲ制行ス豈之ヲ有道ノ事ト謂

フベケンヤ到底殺人ノ刑ハ亦暴惡ノ擧タルヲ免カレザルナリ刑典ニ  
曰ク人ヲ殺ス者ハ死ト果シテ暴ヲ以テ暴ニ易ルナリ

或曰ク死刑ハ一人ヲ刑シテ千万人ヲ懲スナリト抑我邦人口三千餘万  
年々死刑ニ處セラル、者概スルニ千人少シトセス蓋數百千年之ヲ懲  
ラシテ未曾テ懲リザル歟然而シテ歐米各國ヲ合スレハ其人口固ヨリ  
我ニ數倍セリ其死刑ニ處セラル、者ハ數國ヲ合シテ一歲僅ニ數人ニ  
過キス何ソ凶惡人ノ我ニ多クシテ彼ニ少キヤ蓋刑律ノ彼此同シカ  
ラズ死刑彼ニ少ク間或ハ全ク死刑ヲ廢シタル國アルト又所謂開化ノ  
度同シカラザルニ因ルノミ

復讎ハ古來之ヲ善事トセリ然レモ決シテ善事ニ非ズ却テ大惡事ナリ  
國家今日謀殺律ヲ以テ復讎人ニ當ス慘酷ニ非ルナリ復讎ハ實ニ百方  
謀搆讎人ヲ殺スナリ故ニ復讎律ノ改定ハ吾人慣習ニ依リ或ハ之ヲ論  
駁スル者ナシトセズト雖間然スベカラザルナリ但文明開化能ク復讎

ヲ嚴禁シテ猶此死刑ヲ存ス余ガ解スルコト能ハサル所ナリ蓋復讎ヲ禁  
シテ猶死刑ヲ存スルハ猶酒ヲ禁シテ之ヲ罰スル酒杯ヲ以テスル如キ  
歟

或ハ曰ク刑ノ主旨ハ吾人同社ノ害ヲ除ク所以ナリ故ニ暴惡ノ人ハ之  
ヲ殺シテ以テ吾人同社ノ害ヲ除クナリト此言理アリ然レモ能ク此主  
旨ヲ達スヘキ者死刑ヲ除テ他ニ求ムベシ所謂流刑ナリ而シテ流刑ハ  
却テ毒ヲ他邦ニ移ス猶白圭ノ水ヲ治ムルニ均シク鄰國ヲ以テ壑トス  
ルノ害アリ行フベカラズ蓋能ク刑ノ主旨ニ適シテ施行スヘキ者ハ唯  
徒刑若クハ懲役アルノミ  
尙書ニ曰ク刑ヲ無刑ニ期スト其旨趣善美ナリト謂フベシ然レモ能ク  
之ヲ空言ニ論ズベクシテ未ダ之ヲ實地ニ施スベキヲ知ラズ余ハ則刑  
ヲ死刑ナキニ期ス然レモ歐米文明ノ各國死刑ヲ廢スルノ說出テヨリ  
既ニ百年彼ニ在テモ未ダ全ク行ハルコト至ラズ矧ンヤ我東方ニ於テ

ヲヤ蓋唯之ヲ將來ニ期スルノミ今日ニ在テ此論ヲ發ス今自ラ其尙早  
キヲ知ルト雖聊ベツカリヤ氏ノ譽ニ倣ヒテ我邦人ノ睡魔ヲ驚カサント  
欲スト云フノミ

○禾花煤助法之說

津田 仙

明治六年維納府大展覽會ノ開場ノ時拙者モ其差遣セラレタ官員ノ一  
人テアリマシタ當時目ニ觸レ耳ニ聽ク所ノ利益ハ種々様々デアリマ

シタ時ニ農學ノ大家荷蘭人荷衣白蓮氏ト云フ大先生ニ邂逅シマシタ  
アグローム

コレハ實ニ拙者無上ノ大幸デアリマシタ幸ニ先生ハ維納府外數里ノ  
地ニ住居デアリマシタ拙者一見手ヲ握テ殆ト傾蓋ノ想ヲナシマシタ

拙者先生ニ引カレテ其住居ヘ往キマシタ其後拙者先生ノ家ニ客トナ  
リ半年教授ヲ受ケマシタ先生ノ性質草木ヲ愛スルハ飢渴シテ飲食

ヲ求ムルヨリモ嗜ミマス二十余年前維典堡人西勃土民ツピンテンボルグ シーボルド(譯カアリテ)荷

蘭人トナリ我長崎ヘ來リ我邦ノ草木ヲ歐羅巴ヘ携ヘ歸リ現今カノ諸

國ニ傳播シ居ルハ概テ皆先生ノ手ヲ經タモノデアリマス西人ノ我草木ヲ愛玩シ我草木ヲ貴重スルハ實ニ先生ヨリ始リマシタ先生ノ功ハ寔ニ盛ナルモノデアリマスマイカ先生殊更ニ日本人ヲ愛シマス先生酷ク親切ニシテ特ニ拙者ヲ眷愛シ先生常ニ拙者ヲ日本ノ愛兒ト呼デールソンヒマシタ先生晨夕拙者ニ培養ノ術ヲ親切ニ教ヘマシタ又試驗實地ニ臨ンテハ先生一ニ必ス其理ト其法トヲ丁寧ニ講シマシタ先生毎ニ倦怠ノ色ハ少シモ見ヘマセヌ故ニ拙者暫時間幸ニ先生多年實驗スル所ノ大概ヲ覗フヲ得マシタ實ニ拙者無上ノ大幸トハ則此事テアリマス先生已ニ年七旬ニ餘リマス身體強健尙能ク鋤ヲ執リ畚ヲ荷ヒ且暮灌溉シテ自ツカテ樂ンテ居リマス所謂老而益壯ナルト申スハ此人ノ謂テ御坐リマシヤウ爰ニ先生最モ我世界ニ鴻益アル大發明ノ三件ガアリマス乃チ拙者ガ上年撰述上木シタ農業三事ノ書ガ其大畧テアリマス其第三件ハ禾花煤助ノ法ヲ以テ去年九月十三日東京第二大區十

二小區麻布古川ノ稻田ニ於テ實地ニ施シ十一月十三日收穫イタシ其  
 稻ト通例成熟ノ稻トチ比較イタシタ所ガ驚ク可キ程米ノ性質モ上等  
 ニナリ肥後米ト秋田米程モ違フ様ニナリマシタ加之其收納高ノ概表  
 ハ即チ左ノ通テ御坐ル

甲ノ場所試験

壹坪ニ  
 付粃 媒助稻

舊法稻

差

升目 壹升四合六夕

八合九夕

五合七夕

目方 四百九十五匁六分

二百八十壹匁二分四厘

二百十四匁三分六厘

乙ノ場所試験

升目 壹升八合三夕

壹升四合三夕

四合

目方 六百十五匁八分八厘

四百十三匁二分七厘

二百〇二匁六分一厘

丙ノ場所試験

升目 壹升二合三夕

八合五夕

三合八夕



目方 三百五十四匁四分七厘 貳百四十八匁二分 百〇六匁二分七厘

右三ヶ所平均

升目 壹升五合六才六 壹升〇五夕六才六 四合五夕

目方 四百八十八匁七厘二毛 三百十九匁三厘三毛 百六十九匁三厘九

升目百分割 四割二分五厘八毛 煤助法施術ノ益

量目百分割 五割五分壹厘九毛 煤助法施術ノ益

又本年第九大區小三ノ區飛鳥山下ニ於テ施術シタル麥ヲ六月十四日

收獲シタル概表左ノ如シ

第一試驗場五十二番地 畑主 戶部喜想治

煤助小麥 舊法 差 割

壹坪目ニ 七合四夕 五合壹夕 貳合三夕 四割五分〇九八

目方 貳百四十壹匁 百七十五匁 六十六匁 三割七分七一

第二 四十七番地 畑主 鈴木安左工門

長壹丈 二尺 壹升〇五夕 七合三夕 三合二夕 四割三分八厘三毛

二百七十五匁 二百〇三匁 七十二匁 三割五分四厘六毛

第三 五十番地 畑主 同 人

穗十本 付目方 七匁 四匁五分 二匁五分 五割五分五厘

第四 三十番地 畑主 戸部喜想治

一畦 付升目 二升九合六夕 二升三合三夕六合三夕 二割七分〇三八

目方 八百二十目 六百五十目 百七十目 二割六分一五

第五 二十九番地 畑主 戸部彌想治

最上穗 十六匁六分五厘 十壹匁九分 四匁七分五厘 三割九分九一

平均 升目ノ割 三割八分六厘五毛

量目ノ割 三割八分九厘四毛

媒助之益

右媒助ノ法ハ農業三事書中ニモ概畧述ベマシタル通り甚手短キトニ  
テ實ニ其勞ト申シテハ田圃ノ惡莠ヲ一回芟除スルヨリモ尙ホ易キト

ニテ其器械ト申スハ我邦俗新年門戸ニ懸ル注連繩ノ如ク羊毛ニテ製  
シタルモノニテチト憚リナガラ當今世間ニテ津田繩ト稱スルモノチ  
アリマス此繩へ蜂蜜チ稀薄ニ抹擦イタシテ米麥ノ花方ニ開カントス  
ル際ニ臨ミ其穗ノ巔チ四五回摩盪スルマテノ事テアリマス三人ニテ  
一日一町餘ノ田圃ニ施ス<sub>ト</sub>ハ酷々容易デアリマシユウ斯ク簡易ナル  
方法即チ兒戲ニ類スルトモ云フ可キ程ノ術チ以テ該表ノ如キ三割乃  
至五割以上ノ大利益アル確證アリテ之レカ爲メニ更ニ費用チ増スデ  
モナシ又更ニ農夫チ勞スルデモナクシテ丸テ徒手取同様ト云フ收納  
チ増ス<sub>ト</sub>テアリマスレバ加減乗除二一天作イ<sub>ン</sub>一ガ一ト出カケテモ  
殆ト倍量ノ益ガアルト云フモサマデ誣言テモアリマスマイサレバ農  
家ハ三年耕シテ一年ノ糧チ贏シ政府モ租税ノ取り心ロヨク我三府六  
十縣ノ人民即當今猫モ杓子モ唱居ル我が三千五百万ノ兄弟ハ三年一  
回ノ凶歲アリテモ飢餓ノ憂チ免ル可キ割合デハアリマセヌカ嗚呼ナ

ント其鴻益ハ仰山ナモノニテ荷衣白蓮先生ノ我世界ニ鴻業偉勳ヲ顯  
ハシタルハ驚キ入タル事デアアリマセンカ今我政府ノ内外債合シテ  
三千百二十万金餘ノ借金位ハ三年ヲ出ズシテ人民ヨリ之ヲ以テ完濟  
スルコトハ容易デアアリマスマイカサスレハ政府ニ於テ一意氣身ヲ入  
テ御世話カアラバ内外債ハチロカナコト皇室ノ御新築デモ諸官省ノ御  
普請デモ華族士族ノ祿債デモ鐵路デモ電線テモ何ソテモ蚊テモ十數  
年ノ後ニハ徒手ニテ出來ル工風ナレトモ政府ニテハマタ農業ハ鄙事ナ  
リトデモ思ハル、ニヤ之ニハ一向御着手ナシ(新川濱田名東岐阜宮城  
其他二三縣ハ兎ニ角)世間一般ニ實事ハ一圓馬耳風ニテ御頓着ナシ故  
ニ拙者已ムヲ得ズ切ニ社中ノ諸賢ニ望ミマスルハ此法ヲ普ク我國ノ  
農家へ播傳實行セシムル手段ノ垂示ヲ賜ハラントノ一事ヲ御坐ル

## ○養精神一說二

阪谷 素

船アリ颶風ニ遇フ之ニ乗ズルノ客歌舞スル者ハ歌舞シ絲竹ヲ善クス

ル者絲竹輕業ヲ善クスル者ハ輕業角力取ハ角力大工ハ大工學者ハ講  
釋ス之ヲ問ヘバ曰ク諺ニ藝ハ身ヲ助クト是レハ俗間事ニ臨ミ無益ニ  
勞スル者ニ喩フルノ談ナリ宋末崖山淪沒ノ時ニ當リ陸秀夫ノ大學ヲ  
舟中ニ講ズルモ亦コレニ類ス而シテ然ラサル者アリ何トナレハ此レ  
難ニ益ナシ然レ之ヲ爲ス猶バイブルヲ信ズル者死ニ臨テ之ヲ唱フル  
ニ同シ死生ハ命ナリ各我力ヲ盡スノ後之ヲ奈何トモス可ラザルノ際  
迷惑狼狽ニスシテ其平生ノ業ヲ忘レザル如此ナリ然ル後以テ爲ス有  
ルベク以テ精神ノ壯ナルヲ觀ル可シ故ニ小子以爲ラク人ノ必志ヲ術  
藝ニ凝ラサシム大ニ精神ヲ養フノ效アリ文藝猶然リ况ヤ武術ノ平生  
筋骨ヲ強クシ膽力ヲ壯ニシテ難ニ臨ミ大益アル者ヲヤト或ハ曰ク方  
今双刀ヲ脱シ漫ニ銃發ヲ禁シ暴横ヲ戒ムルノ時ニ當タリ此說ヲ爲ス  
ハルバリーニ近シト是レ大ニ然ラズ凡ソ國ヲ立ル彼ノ長固ヨリ取ル  
ベシ而シテ我ノ精神ハ失フ可ラズ之ヲ失ヘバ所謂里婦ノ擧邯鄲ノ步

其取ル所ノ長モ亦却テ害ヲ爲ス武ハ勇ヲ長ズ天下ノ事勇ニ非ル成ラ  
ズ勉強耐忍固リ勇ニ發ス文學ノ業豈ニ怯懦ニシテ勇ナキ者ノ能ク爲  
所ナラシヤ勇ヲ養フハ武ニアリ我邦風習太古ヨリ武ヲ重シ名ヲ惜  
ム畧々日耳曼ニ似タリ王室中古ノ文弱ハ上タル者武ヲ鄙シムニヨリ  
而シテ武士ノ氣別ニ盛ノ所謂大和魂ナル者其說多キモ特ニ武道ノ精  
神ヲ自贊スル而已元龜天正ノ際武道ノ盛ナル精神ノ豪爽ナル近日學  
術開クノ時ヨリシテ之ヲ觀レハバルバリーノ事多シト雖モ其精神膽  
力ノ壯ナル日耳曼佛郎察ノ下ニ非ズ寛永以下治ニ狎レ小ニ安シ務メ  
テ戰國猛暴ノ氣ヲ除キ交際ヲ絶チ自ラ守ルヲ以テ計ノ得タル者トシ  
外ニ進ムノ勢ヒナキ以テ内ヲ養フ可ラザルヲ知ラズ恬熙柔情一隻ノ  
外艦來テ全國盡ク騷擾スルニ至ル文久慶應ノ間外激ニ觸レ奮發ス攘  
夷ハ固陋ノ頑說ナリ然レ勇ノ憤ニ發スル過チ觀テ仁ヲ知ルノ義ニ於  
テ武道ノ一端モ亦存ス之ヲ御スル善カラズ猛暴破裂所謂天誅暗殺ノ弊

豺狼ニ陷ラントス明治以來外國文明ノ治法風習ヲ表明シテ猛暴殺伐  
ノ惡風ヲ變ス藩ヲ廢シ士ノ常職ヲ解シ可也武ヲ海陸軍ニ歸シ脱刀ヲ  
勸メ銃ノ漫ニ發スルヲ禁ズ可ナリ然レ之ヲ矯ル横ニ過ルノ勢ヒ内ニ  
卑屈スルノ習外ニ向テ其弊ヲ重サテ武術盡ク地ヲ掃フ凡ソ官ニ在ル  
者暇アレハ率ユルニ酒色淫聲西洋奴卒ノ陋習ヲ以テシ上下滔々輕薄  
浮靡ノ中ニ陷ル是レ噎ブニ懲リテ食ヲ廢シ羹ノ熱ニ創リテ壺ノ冷カ  
ナルヲ吹キ驕兒ノ剛暴ヲ變ゼントシテ却テ游蕩淫泆救フ可ラザルニ  
至ル者ニ非ズヤ夫人ハ恃ム所アレハ其氣壯學問ノ智識ヲ明ニシ器械  
ノ運用ヲ便ニスル皆其恃ムノ重キ者ナリ術藝ノ恃ミタルモ亦重シ况  
ヤ武術ノ外難ヲ禦テ身ノ衛リタル者ヲヤ獨逸ノ教育ニ於ル生レテ八  
年ヨリ體操ヲ學バシメ其健康ニヨリ後年軍事ノ驍勇ナルヲ期ス婦女  
ト雖モ體操武藝ヲ講シ國家危急ノ用ニ供セシム其國俗ノ慄悍ナルモ  
學問盛ンナルニ付テ其習ヲ變ゼズビスマルク氏ノ賢ニシテ其所謂ハ

タシヤヒテ爲ス數度ニ至リシ者其習俗ノ勇ヲ失ハシメズシテ漸ク開  
 化ノ眞理ニ進ントスルナリ魯西亞ノ野蠻タル舊シ彼得羅帝自ラ諸國  
 ニ遊ビ其長ヲ取ル然レ其國勁悍ノ習ハ益々之ヲ進メテ文明ニ向フノ  
 資トス何トナレバ弟子ノ本體立テ其師學ブ可ク勇氣ハ其弊多キモ百  
 事ヲ爲スノ本タレバナリ文以テ順良ヲ教ヘ武以テ勇氣ヲ養フ勇氣ナ  
 キノ順良ハ敗物ノミ何ソ以テ文明ヲ開クニ足ン小子嘗テ以爲ク色ヲ  
 愛シ金ヲ愛シ國ヲ愛シ親ヲ愛ス愛ハ一也愛ノ用ユル所異ナルノミ辛  
 苦賊ヲ爲シ猛暴虐ヲ爲ス皆膽力ニ發ス膽力ニニナシ之ヲ善ニ用ユレ  
 バ則正大勇偉國勢ヲハルノ精神タリ世ニ廢人ナシ唯惰弱膽力ナキ者  
 之レニ當ルノ氣運轉換蝶較ノ際豈ニ深慮セザル可ンヤ謹テ案ズルニ  
 近歲明詔渙發シテ闔國兵隊タルヲ令ス洵ニ當世ノ美事千古ノ良制ト  
 稱スヘシ然レ兵士族常職ヲ解テ武ハ人民ノ常務タルヲ忘レ庶人ハ舊  
 習ノ柔惰ニ狎レテ其身ニ衛國ノ任アルヲ熟知セズ名ハ闔國兵隊ニシ



テ其實上下恬熙ノ新習ニ化シ本邦固有ノ勇氣消耗ニ歸セントス之ヲ  
率ヒテ風習ヲ一轉スルハ固リ政治ノ公明ト學問ノ知識ヲ長ズルニア  
リ然リ而シテ其政治學制ヲシテ盛ンニ行ハレシメ文武並ビ進ンテ闔國  
兵隊威武ヲ海外ニ輝カスノ事行ハザル可ラズ夫レ闔國兵隊タラシム  
ルノ實其處置容易ニ非ス小子說ナキニ非ズ然レ此篇論ズル所ノ主意  
ニ非レバ姑ク之ヲ舍ク主トスル所ハ武術ヲ興スニアリ體操ノ法固リ  
不可ナシ然レモ刀槍柔術棒ヲ使フノ法我が習用シテ其妙ニ至ル者ナ  
リ西洋ニ出テザルヲ以テ之ヲ擯斥スルハ却テ野蠻ノ見ノミ今士族ノ  
其術ニ熟スル者猶多シ之ヲ中小學ニ之ヲ鎮臺軍營巡查ノ廳ニ聘シ其  
常業訓練ノ暇其宜キヲ謀テ演習セシム可シ而シテ中小學課業ノ暇童  
兒ノ戲遊ニ供スルニ於テ最モ心ヲ注ギ或ハ隔日或ハ毎日順序ヲ追テ  
之ヲ習ハシ又木銃木炮ヲ設ケ兵隊訓練ノ下習シテ爲サシメバ數年ノ  
間所謂順良ノ習強勇ノ氣自ラ並ビ長シ闔國兵隊ノ風習亦自ラ備ハリ

愛國ノ膽力日々ニ壯ン一旦事アルモ訓練ヲ待タズ卒然立テ戰地ニ向  
ハシムベシ精神此ニ至ル獨逸ノ學術此氣ニ奮發シ進ンテ英トナリ佛  
トナリ超テ東洋文明ノ一強國タルモ亦此ニ基ヒセズト爲サンヤ然リ  
而モ猶曰ク武ハ讀書ノ害ナリ文明ノ讎タリ舊ニ習レ故ニ泥スルノハ  
ルハリ一説取ル可ラズト嗚呼余亦復タ何ツ言ン

編輯

森田有禮

印刷

竹内拙三

稟 白

一代價の毎号不同に付豫め決定仕兼候得共前金にて發兌號々先二十冊分御引受の一割引五十冊分の一割半百冊分の一割引にて差上過不足の追て算當の上可申上候

一府下あて御望の方の町所名前前御投書次第發兌毎よ配達可仕遠國の府下あて御引受の御方より前金郵便税共受取不申内の遞送不仕候

明治七年三月

東京藥研堀町

賣捌所 報 知 社

同日本橋通三丁目

取次所 丸屋善七

大坂本町四丁目

同 河内屋眞七

同心齋橋筋北久寶寺町

同 丸屋善藏

同 大徳寺藏

同 同徳寺藏

同 同徳寺藏

大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 日本書紀三十一

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏

同 大徳寺藏